

本能行動の過剰な作動に対する技法の調整

平井慎二

動物の行動は、出生直後を除いて、先天的な反射（＝無条件反射）と後天的な反射（＝条件反射）が混合した反射連鎖の作動により司られる。先天的な反射は、進化の過程で前世代までに獲得した反射であり、変化は1世代では明らかにはならず、臨床的に抑制は生じない。後天的な反射は生後に獲得した反射であり、変化は1代で明らかになり、臨床的に抑制が生じる。

覚醒剤やアルコール等の摂取を反復すれば、それらの物質が薬理作用としてもつ生理的報酬と同様の効果によりそれが生じるまでの神経活動が定着するので、それらの物質を摂取する行動を司る反射連鎖が成立する。その反射連鎖は後天的な反射が本流である。物質使用障害は、第一信号系にそのようにして成立した反射連鎖の作動が、第二信号系の制御を越えて行動を司り、物質摂取行動の再現が反復することが中核の疾病状態である。

物質摂取を司る反射連鎖を抑制する条件反射制御法の疑似や想像では、実物の摂取はしないので、摂取行動の最終まで再現しても、生理的報酬と同様の効果は生じない。また、行動の最終部分を司る反射連鎖にも後天的な反射が多く混在しているので、物質摂取の疑似や想像においては最終行動までの単純な再現によりその行動を司る反射連鎖は抑制を受け、反復によりその作動性は低減し、物質摂取への欲求は生じなくなる。

一方、万引きや痴漢行為等は、本能行動の一部が過剰に生じるものである。それらの逸脱した行動の初発の機序は、仲間からの誘い等により第二信号系が優勢な状態での発現、あるいは過酷な体験の反復により第一信号系全体が過敏で強力となり、進化の過程で成立した狩猟採集行動や異性への接近行動を司る先天的な反射が、現代において押し出されるように作動するものである。それらが様々な割合で影響して、ヒトに逸脱行動を生じさせる。

初発がいずれのメカニズムであっても、反復された後は、逸脱した行動を司る反射連鎖の構成中の後天的な反射の作動性が高まり、その行動は容易に再現されるようになる。そのような状態においても、本能行動の過剰な作動の最終部分あるいは定型的な行動の部分等に多様性はなく、前世代から受け継いだ行動に収束したものであり、主に先天的な反射により司られる。

条件反射制御法の疑似や想像が効果を生じるのは、それらの作業が万引きや痴漢行為等を司る反射連鎖中の先天的な反射は抑制しないが、後天的な反射を抑制し、反射連鎖全体の作動性が不良になるからである。

疑似と想像は、後天的な反射が本流となる物質使用障害に対する方法と先天的な反射が本流となる万引きや痴漢行為等に対する方法は次のように異なる。

物質使用障害に対する疑似と想像は、最終行動まで再現し、効果が生じた。

万引きの疑似において獲得した疑似商品の規定の失い方は、疑似万引きで獲得した疑似商品を、職員が指定した所定の位置に患者が置き、患者がその疑似商品を視認している状態において職員が疑似商品を回収し、患者の目の届かないところに職員が疑似商品をもって移動する方法であり、抑制が良好である。

しかし、疑似万引きで獲得した疑似商品の失い方が、患者が能動的に疑似商品を職員に渡すことを反復していた患者がいた。その方法においてその患者は疑似万引きによる抑制は不良であった。疑似商品の失い方を規定どおりに、職員により回収されるという方法に戻すことにより、まずは、獲得した疑似商品を回収して去る職員を追いかける動作がその患者に生じた。その後、規定の失い方での疑似万引きの反復により、その患者の欲求は消えた。

痴漢行為の想像は、通常は、想像の中で対象の女性に接近したが触れた瞬間にその対象の女性が大木になるなど、行動を生じさせるが行動が失敗となる設定にしており、その方法により、反射の抑制は急速に進む。しかし、対象に接近し、触れ続ける想像の反復では、反射の抑制は不良であった。

これらは、本能行動の過剰な作動に対する疑似と想像において、再現する行動を生理的な成功行動の完了をさせない設定にするだけでは抑制が不良であることを示唆する。

本能行動の過剰な作動で生じる逸脱行動を司る反射連鎖に対して、先天的な反射が連続して行動を進行させる部分での終了による生理的行動の不成功では、再現を終了した行動にかかわる反射は先天的な反射が多いので抑制が不良である。

本能行動の過剰な作動を抑制するための再現においては、再現する行動の最終部分は後天的な反射が多く存在する部分とすること、あるいは生理的行動に明らかに失敗させることが効果的である。